

初級日本語クラスにおける多読朗読プロジェクト実践報告 ——多読からつなげる朗読活動の一考察——

土居美有紀・亀井文馨

要 旨

南山大学留学生別科の初級後半日本語クラスでは2018年秋学期から2023年秋学期現在まで多読活動を継続している。新型コロナウイルス感染拡大により急遽始まった2020年からのオンライン授業では個別の活動である多読に加え、自分の好きな作品をクラスメートと共有する朗読発表を行うようになった。対面授業に戻った2022年秋学期からは以前とは少し形を変えた「多読朗読プロジェクト」が実践された¹⁾。プロジェクト後に行ったアンケート調査結果からは、概ねこの活動を好意的に捉えた学生が多く、学生によっては多読の効果を実感していることが分かった。一方で、初級後半レベルの日本語力で実施する場合の課題や多読と結び付けた朗読活動により新たに生じた課題も浮き彫りとなった。本稿では「多読朗読プロジェクト」に至るまでの多読活動の変遷を記し、執筆者2名がコース主任を務めた2022年秋学期と2023年春学期の活動内容と朗読発表の様子、課題等について報告する。

キーワード：初級後半日本語、多読、朗読、プロジェクト、発音

1. はじめに

南山大学外国人留学生別科のIntensive Japanese II（以下日本語II）は『初級日本語げんきII』を主教材とした初級後半の日本語クラスで、週8コマ（1コマ100分）を14週間かけて学ぶ日本語の集中コースである。2学期制となっており、秋学期と春学期がある。コース主任の下、複数の教師がチームで担当しているが、「学習意欲の維持と中級レベルに入るための読解力を目指し、自分のペースで楽しみながら読解力を伸ばす」ため（大西他2022：p99）、また「学習者が自ら読むものを選択でき、教科書を使用した精読中心の授業とは異なる自由度の高い」活動のため（大西他2022：p100）、2018年秋学期から限られた授業時間の一部（20分程度）を使って多読活動を実施している。コース主任や担当教員は毎学期変更があるが多読の活動は継続して行われてきている²⁾。また、2020年秋学期と2021年春学期には多読に加え朗読も取り入れられた。本稿では初めに、日本語IIにおける多読活動の変遷について記す。次に、執筆者2名がコース主任を務め実践を行った2022年秋学期と2023年春学期の多読朗読プロジェクトの活動をまとめ、2023年春学期の

実践概要とアンケート結果を報告するとともに、初級後半クラスで多読の延長線として朗読を行う場合に考慮が必要な点について述べる。

2. 先行研究

多読がもたらす効果については様々な研究や実践報告で取り上げられている。三上他(2011)では、多読を行った学生は作品中の語を作品外の語より多く習得したことが報告されている。また朗読については、中村他(2022)が2020年春学期に本学の中級日本語クラス(Intensive Japanese IV)にて「日本語を体感する、他の人とイメージを共有する素晴らしさに触れる、解釈しようとすることの面白さを知る」という3つの目標のもとに朗読活動を実践している。中村他は、ACTFL³⁾による外国語学習スタンダードの5つの目標領域(コミュニケーション、文化、つながり、比較、地域社会)の枠組みの中で朗読活動を通してどのようなことが達成できるかを述べ、「朗読とは、朗読の表現を追い求めるプロセスの中で、日本語の諸相を体感したり日本の文化・社会・歴史の背景を学んだりしながら、そのプロセスの中で形成した自分なりの考えを他人と共有し、さらに深めることができる活動」であり、「言語と文化を学びながら、理解の楽しさ、表現することの醍醐味を体験させられる学習活動の一つ」であると述べている(中村他2022:p68)。

2.1. 2018年秋学期から2021年春学期日本語Ⅱでの多読活動の変遷

2018年から本学の日本語Ⅱで行われている多読活動については大西他(2022)に詳しく報告されている。表1は多読実施初年度である2018年秋学期から2021年春学期までに日本語Ⅱで行われた多読活動をまとめたものである。

2018年秋学期から2019年秋学期までは、NPO多言語多読の『レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫』や『にほんご多読ボックス』のレベル1～3など、日本語学習者向けに平易な文章にリライトされた紙媒体の多読教材や、子供用の絵本をクラスに持ち込む形で多読活動を行った。その際、宿題を課すことはなく成績評価もしなかった。

しかしながら、2020年春学期半ばに新型コロナウイルス感染拡大を受け、オンライン授業に切り替わった後は、多読活動(6回)も日本語Ⅱコースの成績の一部に含めオンデマンド課題としてオンライン上でCanvas(LMS)を使用し、継続されてきた。オンデマンドのオンライン多読では、NPO多言語多読のウェブサイト「にほんごたどく」にある無料の読み物を使用したほか、対面授業では扱わなかった4コママンガや昔話の動画も取り入れられた。

2020年秋学期にはオンラインでの多読活動が前回の6回から12回と倍増し、オンデマンド多読学習活動をより豊かなものにすることが急務となり、その解決策の一つとして教

表1 2018年秋学期～2021年春学期までの日本語Ⅱでの多読活動

年	2018年秋～ 2019年春	2019年秋	2020年春	2020年秋	2021年春
授業形態	対面（20分程度） 2018年秋6回 2019年春8回 2019年秋8回		1月～3月：対面4回 3月～：オンライン Canvas（LMS）を使ったオンデマンド課題6回	Canvas（LMS）を使ったオンデマンド課題 2020年秋12回（多読8回＋その他4回：説明・POP作り、紹介作文・朗読発表） 2021年春11回（多読9回＋その他2回：紹介作文・朗読発表）	
教材	『レベル別日本語多読ライブラリー にはんごよむよむ文庫』、 『KCよむよむ』、子供用絵本				
		『にはんご多読ボックス』			
			〈オンライン〉NPO多言語多読のウェブサイト「にはんごたどく」にある無料の読み物、NHK for school「おはなしのくに」の昔話などの動画、マンガ（MACHA-やさしい日本語） ※一回に掲載する読み物や動画は絞って掲載（10点以下）		
				・付属音声のない多読本について劇団員の協力を得て朗読音声を作成 ・リライトされていないもの（教師の解説を付けた詩や歌）を追加	
					長い動画や難易度の高い動画の追加（JAPANGLE『マンガ』『すし』）
活動	読書カード（タイトル、短いコメント、20分間に読んだ本と途中までしか読めなかった本は読めたところまでのページを記録しておく。）		毎回2点選んで読み、読書後に「難易度、面白さ」を評価しCanvasに提出。	・Wordファイルの読書記録（1～3文のコメント、好きな部分〔フレーズや言葉〕を記録。）クラスメートがおもしろそうだと思う教材を学期前半2点、後半1点選び、読書後にCanvasに提出。「難易度、おもしろさ」の評価は割愛。 ・好きな言葉やフレーズを声に出す。	Canvasのディスカッションボードを活用した読書記録（難易度、おもしろさ、コメント〔英語/日本語〕、好きな言葉・フレーズの記録。学生同士はお互いの投稿が見られ、コメントのやり取りも可能。
		読書カードに「難易度、おもしろさ」を追加。			
					クラスメートに紹介したいよかった本のPOP作り
					紹介文を書く
				一番好きな作品の朗読。発音練習（教科書『げんきⅡ』の読み物の音読練習）と並行して行った。	
				Canvasに朗読音声と本の紹介文（5～6文）を掲載	Zoomを使ったライブによる朗読発表

材をより魅力的に見せられるよう腐心し、朗読を聴くことができるようにした。また、作品をより深く理解し表現することや、クラスメートと作品を共有すること、日本語が体感できる読後活動として「朗読発表」も初めて行われた。学生は学期中に多読で読んだ作品の中から気に入ったものを1点選び、作品の紹介文を書き、朗読を行った。朗読箇所は個人が選んだ作品の好きな部分（5～6文）で、2020年秋学期は朗読の音声ファイルと作品の紹介文がCanvasでクラス全体に共有され、学生はお互いに自由に鑑賞した。

2021年春学期は、オンラインだからこそ取り組みやすい活動として多読だけではなく多聴・多観を意識した活動も行われた。学期中盤には5分程度の短い絵本の朗読動画から20分もの長い文化紹介動画の視聴と詩の朗読動画も課題とした。また、前学期に続き「朗読発表」を実施したが、この学期はCanvasを使用したオンデマンドではなくZoomの画面共有で作品のイメージを表す写真や絵などを共有しながら行われた。これらの朗読活動については、学習者がそれぞれ意欲的に楽しみながら朗読していたことが報告されている。

また、2020年秋学期と2021年春学期は、主教材『げんきⅡ』の読み物の音読練習を学期中継続的に行ったことにより、学生は朗読発表においても自然な日本語のまとまりやフレーズを意識して表現していたことにも触れている。そして、朗読発表の前に少しずつ発音練習を行うことの効果について言及している。

3. 2022年以降の日本語Ⅱでの多読朗読プロジェクト実践

3.1. 2023年春学期実践の背景：2022年秋学期の実践

2022年秋学期は約2年半ぶりに留学生が渡日し対面授業に戻るようになった。2018年と2019年同様、授業時間内で毎週20分ほど使い、計10回⁴⁾の多読を実施した。また、2020年秋、2021年春学期の活動（表1参照⁵⁾を参考に、1学期間かけて行った多読活動のまとめとして朗読を取り入れた発表「多読朗読プロジェクト」を行うことにした。表2に全体の流れを示す。

1) 教材について

2020年春学期から少しずつ追加や変更しつつ引き継がれてきたオンラインの多読教材を併用しながら、従来の紙の本を使用し多読を行った。毎週、新しい多読教材のリンクをいくつか紹介したCanvasの課題ページを学生に共有するとともに、教室に持ち込む紙の本も少しずつ難易度を上げつつ種類を増やしていった。

表2 2022年秋学期 日本語Ⅱ 多読朗読プロジェクト全体の流れ

週	活動	学生がすること		教師がすること
		朗読	本の紹介作文	
W11	導入	多読の時間にモデル発表に使用する『おむすびころりん』を読む。		他の多読本と一緒に多読教材『おむすびころりん』 ⁶⁾ を教室に持っていく。
	プロジェクトの説明、本選び	発表する本を1冊選び朗読したい部分(150-200字)を提出する。(好きなシーンや話のクライマックスなどから選ぶ)		教師が『おむすびころりん』を題材にして発表の例(本の紹介と朗読)を見せる。「本の紹介文」のモデル作文を提示し、パワーポイントのスライドを見せながら行う。
	朗読の練習 & 本の紹介文①～③		「本の紹介文①」を書く。授業で書く時間を少し取り、残りは宿題で仕上げる。	学生が選んだ本によって「本の紹介文」のフォーマットが記された作文用紙を配布する。「パターン1(物語)」、「パターン2(説明文・紹介)」
W12	朗読の練習 & 本の紹介文①～③			<ul style="list-style-type: none"> ・本の紹介文①の返却。日本語や説明が分かりにくい部分、情報が間違っている部分などのフィードバックを行う。 ・日本語Ⅱの授業で習った文法をできるだけ使って書くように促す。
		朗読の練習をする。(練習シートに練習した日、回数、コメントを書く)		「朗読シート」 ⁷⁾ を配布し、説明する。
W13		紹介文②(書き直し)を提出。		紹介文②の返却&フィードバックを行う。
		紹介文③(書き直し)を再提出する。		朗読の練習を促す。
W14	発表のスライド	発表のスライド(紹介文のポイントを書いたスライドと、朗読する部分のテキストに絵/写真1～2枚をつけて)提出。		希望者と朗読の個別練習を行う。
	発表	朗読の音声ファイルを提出。	本の紹介文のスピーチ動画を提出。	スピーチと朗読の採点を行う。
		小グループで「本の紹介」のスピーチと朗読の発表を行う。		グループの様子を観察。必要に応じてコメントや質問をする。

2) 本の紹介文について

2019年秋学期に、「私が一番好きだった本」について本の紹介文を書いた時は、表3のパターンを使用した。物語を紹介する本に選んだ学生は「パターン1」を、図鑑や何かを紹介している本を選んだ学生は「パターン2」を使い、パターン1、パターン2にはそれぞれモデル作文が添付されている。作文は「①どんなことが書かれている本か、②どうしてこの本が一番好きか、③どんな人に読んでほしいか」の3つの段落から成り、②の部分は

自由記述だが、①と③は名詞修飾など日本語Ⅱの授業で習った文法項目を使った文構造になっており、空欄に自分で言葉を入れることで文が完成する。

2020年秋学期の実践（大西他2022）では、中村が改訂を行い、①と②の間に「②-1. 何を教えてくれるか」が追加され、4つの段落構成になった（表4）。また、この学期はリライトされていない文章に触れる機会を増やす目的で詩や歌が多読教材に追加されたので、紹介文のパターン（「お話」と「説明文・紹介」）に「詩」が追加された。

2022年秋学期の実践では、朗読だけでなく、紹介文も覚えて発表するという期末プロジェクトの形にすることにしたので、中村の改訂版をさらに改良した。当初、紹介文の「②-1. 何を教えてくれるか」（表4）の部分は中村の実践と同様に一文書かせるだけに留めようと考えていたが、作文の初稿の段階でなぜそのように考えたのか、学生の考えが理解しにくいものが散見された。そこで作文の発表を聞くクラスメートのために説明を追加

表3 2019年秋「私が一番好きだった本」の作文（本の紹介文）の構成

パターン1（お話）	パターン2（説明文・紹介）
①どんな話か（だれが何をするか） これは、_____話です。 _____。	①どんなことが書いてある本か これは、_____話です。 _____。
②どうしてこの本が一番好きか （自由記述）	②どうしてこの本が一番好きか （自由記述）
③どんな人に読んでほしいか ・ _____人は絶対にこの本 _____はずです。 ・ _____という本が好き な人は、絶対にこの本も____ _____はずです。	③どんな人に読んでほしいか ・ _____人は絶対にこの本 _____はずです。 ・ _____という本が好き な人は、絶対にこの本も____ _____はずです。

表4 2020年秋からの「私が一番好きだった本」の作文（本の紹介文）の構成

パターン1（お話）	パターン2（説明文・紹介）	パターン3（詩）
①だれが何をした話か これは、_____が_____話です。	①何が書いてある話か これは、_____が書いて ある話です。	①どんなことが書いてある詩か これは、_____が_____につい て考えることができる詩です。 【人間、神様、人生、時間、平和、 愛etc.】
②-1. 何を教えてくれるか この話は、_____【～を/～と】 教えてくれます。	②-1. 何を教えてくれるか この本は、_____【～を/～と】 教えてくれます。	②-1. 何を教えてくれるか この詩は、_____【～を/～と】 教えてくれます。
②-2. どうしてこれが一番好きか （自由記述）	②-2. どうしてこれが一番好きか （自由記述）	②-2. どうしてこれが一番好きか （自由記述）
③どんな人に読んでほしいか _____人は、この本 _____はずです。	③どんな人に読んでほしいか _____人は、この本 _____はずです。	③どんな人に読んでほしいか _____人は、この詩 _____はずです。

する必要があると判断し、また続けて行う朗読の聞きやすさという観点からもある程度どのような話か本の紹介のスピーチを聞いて掴めているとよいと考え、「②-1.」は「この話は、～を／と教えてください」をトピックセンテンスとした段落（250～300字）で説明を書かせることにした。また、「②-2.」の「どうしてこれが一番好きか」の部分も、理由として「絵がかわいいから好き」などの単純な答えではなくもう少し本の内容に踏み込んだ理由を語らせるため、一言ではなく2～3行は書くように指示した。一方で、学期末の授業スケジュールとの兼ね合いで詩は朗読の対象から外した。

3) 発表スライドについて

紹介文のスピーチでは、発表を聞くクラスメートに発表の内容がより理解しやすいよう、パワーポイントのスライド（2、3枚程度）も作成させることにした。作文の3つのポイント（どんな話か、何を教えてくれるか、どんな人におすすめか）を書いたスライド、朗読に入る前に「どんなシーンか」を紹介するスライド、朗読中に見せる「朗読する部分のテキスト（文字をタイプしたもの）」にそのシーンを表す絵を挿入したスライドも作成させた。

4) 朗読について

朗読する箇所は2020年秋、2021年春では自分が好きな部分5～6行であった。今回は多読の時間に扱った本の種類が多く、全員が同じ本を読んだことがあるわけではなかった。そのため、選んだ作品の内容や雰囲気が他者に伝わりやすいよう、自分の好きなシーン（150～250字）を選んで朗読させることにした。

5) 発表と評価について

発表は、学期終盤の時期と重なり十分な授業時間が確保できないこと、読んだことがない可能性がある本についてクラスメート全員分（1クラス12名ほど）の発表を聞き続けることは初級後半の学生にとって負担が大きいためであろうことを考慮し、グループ発表にした。まず、発表の当日までに「本の紹介文のスピーチのビデオ（以後スピーチビデオ）」⁸⁾と「朗読の音声ファイル（以後朗読音声）」を提出させ、授業では学生を2つのグループに分け（1グループにつき5、6名）、スライドを見せながら順番に発表させた。

多読は成績評価に入れなかったが、発表のための活動は①紹介文の作文、②発表（スピーチビデオと朗読音声）、③課題（作文、スライド、朗読練習シート）の提出でそれぞれ評価した。

6) 教師の気づき

スピーチビデオと朗読音声を事前に提出させておいたからか、クラスでのグループ発表は、リラックスした様子で和やかに行われた。発表時間が長すぎると間延びし、聞いている学生が飽きるのではないかと思われたが、クラスメートが紹介する本に興味を持ち、熱心に発表を聞いたり、コメントをしたりしている様子が窺えた。また発表する学生からも自分が好きな本についてクラスメートに熱心に語る様子が見られ心配は杞憂であった。だが、学生は他のグループの発表を見る機会がなく、おすすめの本の情報や、クラスメートの良い朗読を聞き逃してしまった。それに、狭い一教室に2つのグループが同時に発表するという形態であったため、別のグループの発表者の声が気になって発表が聞きにくいという問題もあった。

グループ発表の雰囲気は概ね良好であったが、作文をそのまま読んでいる学生が多いセクションもあった⁹⁾。また朗読の発表では、気持ちを込めて本の登場人物になりきって読んでいる（声を登場人物のイメージに合わせて変えている）が、日本語のアクセントが自然ではなく（「次にこうやって）食べる [低高低]」が「食べる [低高高]」になっているなど）聞きにくい学生もいた。回数は少ないが、2020年秋学期と2021年春学期同様この学期も『げんきⅡ』の読み物の一部を使い、イントネーションが示されたテキストを見ながら音読練習をクラス全体で3回程度行っていたが、発表前の個別朗読指導は行わなかった。希望者には教師が5分程度個別で指導をしたが、希望者は各セクション1、2名のみであった。紹介文の最終稿（③）の提出やスライドの作成など、発表の準備に追われる学生が多く、朗読練習を早く始めて、教師にフィードバックをもらう余裕がある学生は少なかったのかもしれない。また、オンライン上の本を選んだ学生は付属音声を聞いて練習できたが、紙の本を選んだ学生は音声がないため、読み方が自己流になってしまった可能性がある。スキットなどの演劇の場合、セリフに感情がこもっていれば、イントネーションに多少違和感があってもあまり気にならないが、朗読の場合、声のみで表現しなければならず、聞く側は音声に集中することになり余計に発音が気になったのではないだろうか。このことから、モデル音声を使った発音練習の必要性を感じた。

3.2. 2023年春学期の実践

3.2.1. 履修者

アメリカをはじめとする6か国（アメリカ、イタリア、ガーナ、メキシコ、ブラジル、ベトナム）からの留学生33名であった。

3.2.2. 2022年秋学期からの変更点

2022年秋学期の実践を踏まえ、2023年春学期も実践を行った。活動の全体的な流れは表2と同じだが、教材、発音・朗読指導、発表の方法を改善した。

1) 教材について

この学期は『げんき多読ボックスBox2～4』¹⁰⁾を追加した。既知語占有率が95%以上であれば学習者は教師や辞書の手助けなしで内容が読み取れると言われている (Nation, 2001) ことから、多読教材は既知語率が95%以上のものが望ましい。本コースでは『げんき』を主教材としており、『げんき』の既習語で文章の95%以上をカバーしている『げんき多読ボックス』は学生にとって読みやすいのではないかと考え、新たな教材として加えた。

6回目の多読の後(10週目)に、「多読朗読プロジェクト」の説明を行い、今まで多読の時間に読んだ本の中で一番好きな本を選ばせた。その際、プロジェクトで紹介する本は絵本ではなく多読教材の中から選ぶよう学生に勧めた。これは、前学期に子供用の絵本を選び紹介した学生がいたが、その絵本の文字数が極端に少なく、本の紹介文を書くのに苦労しており、発表内容自体も深まらないという事例があったためである。

2) 発音・朗読練習と指導について

前学期の反省を踏まえ、この学期は学生が朗読に選んだ部分の音声を全員に提供することにした。音声データがない紙の本を発表に選んだ学生が31名と多かったので、どの学生も同じ条件で練習できるよう、執筆者(土居)が学生が朗読に選んだ箇所を録音し、モデル音声として提供した。初級レベルの学習者の多くは音読さえまなならず、まずは音読がスムーズにできるように練習を重ねる必要があるため、前学期同様事前に「練習シート」を配付したが、朗読練習のポイントに「モデル音声をまねする」を追加した。

前学期は朗読の個別指導は希望者のみに行われたが、この学期は全ての学生に5～10分程度の個別指導を行った。朗読の練習を始めていた学生には音読としてのフィードバック(発音やイントネーション)と朗読としてのフィードバック(場面を想像しながら読む)を行った。まだ朗読の練習を始めていない学生にはこれをきっかけに朗読の練習を早く始めるよう促す狙いもあった。朗読の練習は前学期同様各自が授業時間外に行った。

3) 発表の方法について

発表方法においても改善を試み、この学期はクラス全体で発表を行うことにした。従って、前回採点のために提出させていたスピーチビデオと朗読音声の提出は行わなかった。

3.2.3. 学生を選んだ作品

学生は多読の時間に読んだ本の中から好きな本を1冊選び発表したが、オンライン(Canvas)で提供された本を選んだ学生は3名、紙媒体の本を選んだ学生は30名と、ほとんどの学生が紙の本を選んだ(表5)。

オンライン授業とは違い対面授業では多読のためにわざわざクラスにパソコンを持参しLMS上で提供された多読教材を開くのは手間がかかるせい、この学期は教室に持ち込まれた紙の本を手取る学生が多かった。また、日本に関する本を選んだ学生が多かったが、これは元々多読教材には日本を題材にした作品が多いからであろう。外国の物語を選んだ学生達は、子供の時に読んで懐かしかったので選んだと述べていた。33名中、27名の学生が「物語」を、6名が「説明文・紹介」を選択した。多読の時間には「楽しむために読む」ことを心掛けるよう学生に伝え続けているが、物語を好んで読む学生が多く、特に昔話や怖い話は、発明や伝記などに比べて毎回人気が高い傾向にある。一方、「説明文・紹介」を選んだ学生は、新しい情報が得られたからその本が好きだと述べていた。

3.2.4. 本の紹介文

前学期同様、「学生が朗読する本のメッセージの核となる部分を捉えられているか」を確かめるために2020年秋に中村によって「②-1. 何を教えてくれるか」の項目が追加された本の紹介文のパターン¹³⁾を使用した(表4)。昔話や民話、寓話などの再話や、簡約した多読教材には、教訓やメッセージが含まれているものが多いが、多読教材として独自に作成されたものの中には、オチがあり話としてはおもしろいが強いメッセージが含まれているわけではないものもある。今回のプロジェクトで学生を選んだ本を見るとメッセージ性が強い作品ばかりではなかった。表5の「教訓・メッセージの分かりやすさ」で「△」印の本を選んだ学生の中には本の紹介文の「②-1. 何を教えてくれるか」の部分に合致するメッセージを書くのに苦労したり、メッセージを取り違えてしまっていたりした学生もいた。例えば『バス』¹⁴⁾を読んだ学生の中には「車を運転する時には気をつけたほうが良いということを教えてくれた」と初稿の作文で書いた学生がいた。この作品の核心に迫るなら「死んだおばあさんは死んだ後も自分のことを見守ってくれていて助けてくれる」というようなメッセージが適切だと考えられるが、その学生は日本語力が低い学生ではなかったが作品に込められたメッセージにたどり着くまで深く読み込むことができていなかった。一方で、『学校のトイレ』¹⁵⁾を選んだ学生は「知らない人の質問に答えてはいけないということを教えてくれる」と書いており、教師も本のメッセージとして何を書くべきか迷うような本に対して自分なりのメッセージを見つけて書いている学生もいた。

他方、「説明文・紹介」を選んだ学生は、本の構成自体が情報を伝えるものなので、本の核となる部分を探すところまで深く読み込まなくても「～を教えてくれた」の部分は書

表5 学生が選んだ本

ジャンル	本	レベル ¹¹⁾	紙	日本の話	教訓・メッセージの分かりやすさ ¹²⁾	選んだ人数
物語	ウサギとカメ～イソップ物語より～	0	○	×	○	1
	女の子	1	○	○	△	1
	お菊さん	1	○*	○	△	1
	ジョンさんの夏休み	1	○	○	△	1
	バス	1	○	○	△	2
	ハチの話	1	○	○	△	1
	どうしてねこ年がない？	1	○	○	○	2
	舌切り雀	1	○	○	○	2
	どうしてエビの体は曲がった？	1	○	○	△	1
	浦島太郎	1	○	○	○	1
	学校のトイレ [☆]	1	○	○	△	1
	ゆいさんの夢 [☆]	1	○	○	△	1
	マスクの女の子 [☆]	2	○	○	△	2
	将来さん [☆]	2	○	○	△	1
	犬寺 [☆]	2	○	○	△	1
	山田さんの大問題	2	×	○	△	1
	トルストイ民話集王様とルバシカ	2	○	×	○	1
	最後の葉～ The Last leaf ～	2	○	×	○	1
	ジャックと豆の木	2	○	×	○	1
	一寸法師	2	○	○	○	1
あの子、ちょっとナルシーよね	2	×	×	△	1	
牡丹燈籠	3	○*	○	○	1	
説明文・紹介	お化け	1	○*	○	—	1
	長崎	1	×	○	—	1
	富士山	2	○	○	—	2
	大分の温泉 [☆]	2	○	○	—	1
	金沢の歴史と文化 [☆]	2	○	○	—	1
	スノーモンキー [☆]	2	○	○	—	1

☆「げんき多読ブックス」

※オンライン上のものを2019年から印刷して使用している。

きやすかったようである。

その他、物語を選んだ学生は本のあらすじを紹介するため、「説明文・紹介」を選んだ学生より要約の技術が必要となり、難易度が高くなることも明らかになった。

3.2.5. 学生の発表

本の紹介のスピーチは、ほとんどの学生が覚えて発表できた。今回のスピーチの他に、学期を通して2、3課に一度異なるトピックで課の文法項目が復習できるような短いスピーチ（以降課のスピーチ）を実施しており、中間プロジェクトでも少し長めの大学紹介の発表を行っていたので、スピーチを覚えて発表することに学生は慣れてきていたのかもしれない。ただ、課のスピーチや大学紹介の発表は日常生活での使用頻度が高い語彙を使って発表できたのに対し、今回は、選んだ本によっては普段使用されない語彙が多く、スピーチを覚えるのも大変だったかもしれない。

朗読の発表は、前学期のグループ発表時より全体的に上手く発表した学生が多いと感じた。個別指導は一度だけではあったが、物語の登場人物の感情を汲み取った朗読をしていた学生や、ポーズを入れ、音の強弱をつけるなど聞き手を意識した話し方を心掛けている学生が多かった。発表後に回収した「練習シート」（30名分）から、発表までに一人平均8日間、19回もの朗読練習をしていたことが分かった。中には、「音声を聞きながらまねした」「段落ごとに分けて練習した」「日本人に聞いてもらった」「自分の声を録音して練習した」等、自分で工夫しながら熱心に練習に取り組んだ学生もいた。

しかし、緊張や不安、恥ずかしさからか本番に力を発揮できない学生もいた。また、「説明文・紹介」を選んで朗読した学生よりも『お菊さん』『一寸法師』など物語を朗読した学生の朗読の方が聞きごたえがあり、朗読に向いている作品とそうでないものの差があった。

4. 2023年春学期アンケート調査

プロジェクトの発表終了後にWeb上のアンケートツールを用いて、学生全員へ無記名のアンケート調査を行い、21名から回答を得た。

4.1. 好きだった活動について

「多読朗読プロジェクトで好きな活動」について、6つの選択肢の中から複数選んでもらった（表6）。その結果「好きな本をクラスメートに紹介すること」「クラスメートの好きな本の発表を聞くこと」「発表の時朗読をすること」「クラスメートの朗読を聞くこと」が同率6名で一番多かった。自分が発表をすることもクラスメートの発表を聞くこともどちらも好意的に受け止めていたようだ。

表6 「多読朗読プロジェクトで好きな活動は？」

項目	人数	%
① 好きな本をクラスメートに紹介すること	6	28.6%
② クラスメートの好きな本の発表を聞くこと	6	28.6%
③ 発表の時、朗読すること	6	28.6%
④ クラスメートの朗読を聞くこと	6	28.6%
⑤ 日本語で少し長い発表をすること	3	14.3%
⑥ 日本語で長い本を読むこと	1	4.8%

4.2. プロジェクトでよかったこと・日本語の勉強に役立ったこと

「プロジェクトをしてよかったこと・日本語の勉強に役立ったこと」について自由記述で回答してもらったところ、以下のような回答が得られた（表7）。

日本語の勉強に関しては、新しい単語を覚えることに役立つと感じている学生が多かった。また読むこと自体が楽しかったというコメントのほか、日本語の勉強のために発表するというより純粋に楽しかったというコメントも見られた。

4.3. 今後プロジェクトを改善するには

「プロジェクトをよくするためにはどうしたらよいか」と尋ねると、以下のようなコメントが得られた。今のままでよいという学生（5名）が一番多かったが、発表を覚えなくてもいいと思うという学生（3名）や、クラスで扱った本にとどまらずマンガなど自分が好きな本でやりたいという回答（2名）があった。また、プロジェクトの進め方についてのコメント（4名）も見られた。各自で朗読練習した日付と回数、自己評価のコメントを記入する「練習シート」を配付していたが、「初めてやった課題だったのでよくわからなかった。もっと詳しく説明してくれたら、みんなもっとやると思う（執筆者訳）」（1名）とあり、指示がしっかりと伝わっていないことが判明した。

表7 「多読朗読プロジェクトでよかったこと・日本語の勉強に役立つこと」

単語や漢字、文法などについて
たくさん覚える。
It helped me learn new vocab and practice.
By choosing a book I was interested it was easy to remember and learn useful vocabulary.
Because in every single book is gonna have words that we don't know and we don't have to actually use a dictionary to help us, because is possible to understand the meaning, this is the natural mode to learn and far the best.
新しい漢字をならいました。
プロジェクトのおかげで使役系と受身系がもっとわかると思います。そして、もっと日本語で話すことに慣れます。
読む活動や読み物について
It helped me with my reading and I liked the readings.
早く読み方 (*早く読む読み方) を習いました
I liked getting to practice reading an interesting story out loud.
I enjoyed reading a lot and it motivated me to start reading more in my free time.
日本に来る前に、色々な日本にある所があんまり知りませんでした。だから、選んだ本は金沢についてだったので、でら面白かったと思います。もちろん、面白かったから、読むのも楽しくて、良く習えました。
発音について
It helped my with my intonation and the way I pronounced things. I feel more confident reading things in Japanese.
書く活動について
たくさん書くの練習ができました。先生が書物 (*作文) をなおしたので、私は嬉しかったです。
プロジェクトについて
実は、大学のスピーチは勉強のためにもっと手伝ってくれましたが、このプロジェクトは本当に楽しかったです。(※学期中のプロジェクトには大学紹介の発表とこの多読朗読プロジェクトがあった)
本の好きなシーンを発表するのが一番好きなこと。読むと話す練習。
I liked to see other's people favorite reading.
I was worried about this project for a long time, but presenting it was not as scary as I imagined it would be. Even if I forgot a word or two, I was still able to convey the plot and meaning of the story to the class thanks to all the new grammar and vocabulary I've learned this semester.
I thought it was nice to present a book that we liked instead of a forced topic.
I enjoyed making something that had a lot of different subjects within the overall subject. It made it easier to remember.
全て好きでした。

5. まとめ

2018年秋学期から、毎学期授業担当者が変わりながらも検討・改善を重ねつつ、多読活動を続けてきた。これまでの実践を振り返り、2023年春学期に実施した多読朗読プロジェクトは学生へのアンケート結果から、概ね肯定的に受け止められていたことが窺えた。多読の本を読むことで単語が覚えられた、分からない単語があっても辞書を使わずに意味が分かったなど、先行研究で述べられている多読の効果を実感した学生もいた。また、

自分の発表だけでなく、クラスメートの発表や朗読を聞くことがよかったと回答した学生も複数名おり、作品を楽しみながら他者と共有できたことは、評価できる点であったのではないだろうか。

しかしながら、考えるべき課題も浮上した。学生の負担を考慮すると、今後、本の紹介スピーチはその場で行い、朗読は個々の学生の希望により、発表当日その場、もしくは事前に録音した音声¹⁶⁾をスライドと共に流すという選択式の発表スタイルを取り入れると負担が減らせる可能性がある。それ以外に、朗読発表に適した多読教材の選定方法や、個別朗読指導時間の確保、初級レベルの学生への手順を踏んだ分かりやすい説明や指示の提示の仕方等について、工夫や改善が必要であると考えられる。今回浮き彫りとなった課題について検証し、引き続きより良い活動を目指していきたい。

(注)

- 1) 2020年秋、2021年春のオンライン授業で行われた朗読をベースに対面で初めて朗読発表を実施した。
- 2) 執筆者である土居は多読活動が開始された2018年秋学期から2019年秋学期までと2022年秋学期と2023年春学期の5学期間、亀井は2022年秋学期から2023年秋学期の3学期間、日本語Ⅱでの多読活動に携わっている。
- 3) ACTFL: The American Council on the Teaching of Foreign Languages (全米外国語教育協会)
- 4) 多読朗読活動は計11回(多読10回+発表)行われた。
- 5) 2021年秋学期と2022年春学期も授業は全てオンラインで行われた。多読はオンデマンド課題として継続されたが、朗読は行われなかった。
- 6) 多読日本語学習読本『おむすびころりん』 <<https://nihongotokuhon.jimdofree.com>> (参照日2023年10月18日)
- 7) 「漢字の読み方、発音やイントネーションに気を付ける」、「10回以上読む練習をする」、「気持ちを入れて読む練習をする」、「録音して聞いてみる」などの練習のポイントを提示した。
- 8) 覚えて発表していることが分かるように(紙やパソコン画面を読んでいないことが分かるように)、立って全身が映る状態で発表しているものを提出させた。
- 9) 発表はセクションごとに行われた(全3セクション)。
- 10) Box 1は日本語Ⅱの学生には簡単すぎると思われる、ビギナーレベルの本は多言語多読の教材で用意したレベル0と1の冊数で十分だと考えた。
- 11) 『げんき多読ボックスBox.1』前半(L1-L6)をレベル0、後半(L7-L12)をレベル1、『げんき多読ボックスBox.2』をレベル2とする。
- 12) 分かりやすさの判断は執筆者の主観による。
- 13) 朗読講座等の講師経験がある中村は、朗読するためには、作品の核心に迫り、その作品の核となる部分を理解する(理解しようと努力する)ことが大切だと考えており、作品の核になる部分を掴む仕掛けとしてこの一文を加えた。
- 14) 主人公であるバスの運転手が前のトラックにぶつかりそうになった。すると、ずっと前に死んだはずの自分のおばあさんが乗客として目の前に現れて、前ではなく後ろに戻るように言った。おばあさんに言われた通り後ろに戻ったところ、運転手は病院で目を覚まし命が助かったという話。

- 15) 「トイレの花子さん」を題材にしたもので、トイレで声が聞こえるので怖いという生徒達の声を受けて、教師二人がトイレに行き、トイレから聞こえる質問に返事をしたところ、死んでしまったという話。
- 16) 2020年に行ったオンライン朗読プロジェクト（中村2022）では朗読音声を提出させたが、筆者と自分の経験を重ね合わせ泣きそうな声で朗読したり、自作の音楽とともに朗読したりした学生もあり、学生が朗読をのびのびと楽しんでた様子が観察できた。

参考文献

- 大西涼子・中村透子・渡会尚子・福富七重・竹田和代・土居美有紀・駒田朋子（2022）「初級後半日本語コースでの多読授業—2018年秋学期から2021年春学期までの6学期間の実践—」『南山大学外国人留学生別科紀要第5号』南山大学外国語教育センター、pp. 95-118
- 三上京子・原田照子（2011）「多読による付随的語彙学習の可能性を探る—日本語版グレイディッド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から—」『国際交流基金日本語教育紀要』、pp. 7-23
- 中村透子・福富七重・土居美有紀・佐藤恵美・藤本純子（2022）「日本語中級クラスにおける朗読プロジェクトの試み」『南山大学外国人留学生別科紀要第5号』南山大学外国語教育センター、pp. 65-85
- Nation, I.S.P. (2001) . *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.

教材（主教材）

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語げんきⅡ第3版』The Japan Times Publishing

教材（多読教材）

坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子『初級日本語よみもの げんき多読ボックス [Box 2]』The Japan Times 出版

坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子『初級日本語よみもの げんき多読ボックス [Box 3]』The Japan Times 出版

坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子『初級日本語よみもの げんき多読ボックス [Box 4]』The Japan Times 出版

NPO多言語多読（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ文庫』アスク

NPO多言語多読監修（2016）『にほんご多読ボックス』大修館書店

NPO多言語多読「にほんごたどく特設サイト」< <https://tadoku.org/japanese/free-books/> >（参照日2023年10月18日）

KCよむよむ< <https://kansai.jpf.go.jp/clip/yomyom/> > 2023年10月現在、リンク切れ（新しいリンク先では多読教材の提供は行われていない）

読み物いっぱい< <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Yomimono/Yomimono-ippai/index.html> >（参照日2023年10月18日）

Practical Report on the Extensive Reading × Rōdoku (reading aloud) Projects in Upper Elementary Japanese Course ——A Study of Rōdoku Activity Connected to Extensive Reading Activities——

Miyuki DOI, Fumika KAMEI

Abstract

This paper reported the Rōdoku (reading aloud) activity connected to Extensive Reading activities conducted in the Japanese II, upper elementary level of Japanese class of the Center for Japanese Studies (CJS) at Nanzan University in Fall 2022 and Spring 2023. In Japanese II classes, extensive reading activities have continued from the Fall 2018 semester to the present in the Fall 2023 semester. In the online class that started in 2020 due to the spread of the new Covid-19, Rōdoku activity are introduced so that students could share their favorite works with their classmates, in addition to the extensive reading activity that the class had been doing for some time. This developed the individual activity of extensive reading into an activity that connected the students with their classmates. The “Extensive Reading × Rōdoku Projects” was conducted in the fall semester of 2022, when the students returned to face-to-face classes, as an extension of the Rōdoku activities in the online classes in the Fall 2020 semester and Spring 2021 semester. The results of a survey conducted after the project (Spring 2023) showed that students generally viewed the activity favorably, and that some students felt the benefits of extensive reading. On the other hand, the practical research also highlighted some difficulty of implementing this project at the elementary level of Japanese, as well as new issues that arose from the Rōdoku activities combined with extensive reading.

Keywords : upper elementary level of Japanese, extensive reading, Rōdoku (reading aloud), projects, pronunciation